

令和 3 年 6 月 4 日現在

機関番号：12501

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2020

課題番号：18K02721

研究課題名（和文）アメリカのアクレディテーションシステムにおけるセルフスタディの定着と展開

研究課題名（英文）Establishment and deployment of self-study in the U.S. accreditation system

研究代表者

前田 早苗（Maeda, Sanae）

千葉大学・大学院国際学術研究院・教授

研究者番号：40360739

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 700,000円

研究成果の概要（和文）：この研究は、アメリカの高等教育のアクレディテーションの中心であるセルフスタディについて、どのような背景から開発されたのかを複数の機関別アクレディテーション団体の歴史を辿ることで確認するとともに、その定着の要因としては、第1に大学の自発性の尊重にあるが、それ以外にも以下の2点を要因として挙げられることを明らかにした。  
一つは第2次世界大戦後の連邦政府による大学就学のための財政援助による進学者の急増であり、もう一つが職業教育機関などの新たな設立による高等教育機関の種類の多様化である。この高等教育の拡大がセルフスタディを不可欠なものとした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日本では、アメリカのセルフスタディをモデルとして導入した自己評価は、外部評価（現在では認証評価）とは独立したものとして、本来的に大学が自ら行う営みであるとされてきたが、アメリカではアクレディテーションの前提としてセルフスタディがあること、外部評価のための基準を歴史的に改定する中で大学の視点に立って開発されたこと、高等教育が社会状況の変化等で変革する中で、柔軟な変化をみせているが、その根底には大学の立場の尊重があることが確認できた。日本の認証評価のあり方に示唆を与えるものである。

研究成果の概要（英文）：This study confirmed the background of the development of self-study by tracing the history of multiple institutional accreditation organizations and revealed that the following two factors contributed to its establishment.

The first factor is respect for the initiative of universities, but the following two factors are also cited.

One is the rapid increase in the number of students going on to higher education, which the federal government financed after World War II. The other is the diversification of the types of higher education institutions through the establishment of new institutions such as vocational education institutions. This expansion of higher education made self-study indispensable.

研究分野：高等教育論 大学評価論

キーワード：セルフスタディ アクレディテーション 地区基準協会

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 認証評価制度が日本の高等教育に導入されて10年以上が経過し、2016年の学校教育法施行規則の改正により、大学に対して3つのポリシー(学位授与方針、教育課程の編成・実施方針、学生の受け入れ方針)の設定が新たに義務づけられ、しかも学位授与方針には学位にふさわしい力を具体的に明記することや教育課程の編成・実施方針には教育成果の測定方針を設定することなどが求められた。一方、認証評価機関には大学の3つのポリシーの形式・内容のチェックと内部質保証を重視した評価が求められた。しかし、まだ日本においては、十分に自律的な内部質保証が確立している状況にはない中で、外部の要請による形式的な色彩の強い質保証が行われようとしていることが危惧される。

(2) 内部質保証は、ヨーロッパの大学で内発的に確立してきた仕組みであり、これを日本でも浸透させようとしているものの、アメリカを範として導入された自己点検・評価が認証評価の義務を果たすための手段となってしまう現在の、その定着は難しい。内部質保証というあらたな仕組みの基礎となるのはどこまでも「自律的な」自己点検・評価のはずである。

## 2. 研究の目的

今一度、日本の自己点検・評価のルーツであるセルフスタディに焦点をあて、アメリカのアクレディテーションのプロセスでセルフスタディがどのようにして定着し、発展し、あるいは変化してきたのかを跡づけることが本研究の目的である。その前提として、これまでの研究でアクレディテーション段位の成立史を2つのアソシエーションを対象に明らかにしてきたが、さらにそもう1-2機関の成立史についても確認する。成立~今日までを跡づけることは、今後の日本の高等教育にかかわる質保証の定着にとっても重要であると考えられる。

## 3. 研究の方法

研究者のこれまでの研究の成果を踏まえつつ、主にアクレディテーションの歴史的発展経過に焦点を当てるため、アメリカの公共図書館等が保有する、アクレディテーション団体の歴史に関する文献の研究を主とする。

## 4. 研究成果

### (1) Southern Association of Colleges and Schools (SACS) の特色

SACSは、これまで研究対象としてきたNew England Association of Schools and Colleges (NEASC)、North Central Association of Colleges and Schools (NCA) とほぼ同時期に設立されたアソシエーションであるが、以下の点でNEASCやNCAと異なる状況にあった。

貧困のため中等教育段階の教育を受けている者が多くない。

大学に通った人が北部地域より少ない。

高度な教育を受けた人々に、教育に対する保守的な考え方を持つ者が比較的多い。

人種問題を根深く抱えている。

こうした課題を抱えつつ、SACSの前身は、北部の大学やドイツ留学を果たした革新的な考えを持つ大学教員数人によって形作られていった。アソシエーションとしての正式な発足は1895年である。

NEASCやNCAとは異なり、アソシエーションの設立には中等教育関係者はあまり関与していたとは言えないが、SACSは、この2機関にそん色のない設立目的を掲げた。

1. 協力と相互援助のために南部の学校と大学を組織すること。

2. 奨学金の水準を高め、入学資格の統一を図る。

3. プレパラトリースクールを発展させて、大学から独立させる。

一部の特権的階級ともいえる層を忖度することなく活動を開始する。

しかし、実際の活動では、大学の認定基準と現実がダブルスタンダードになるという現実があったこと、黒人社会をどのように包含していくのか、といった課題があった。

そこで、硬直的な認定基準の見直しの動きが、1930年代から開始される。

これは、アメリカではじめてセルフスタディを開発したNCAとほぼ同時期の動きではあったものの、実際に改革が行われるのは第2次世界大戦後のことである。

特に南部地域においては、戦後、いわゆる復員軍人援護法によって、経済的支援が開始されたことが他の地域に比して大きく影響している。

SACSの定款および基準の改定は、1960年代になってからである。その基準においては、自己評価を重視し、継続的な改善向上を強調した、量的ではなく、質的な視点を強調している。

SACSにおける困難性は、いわゆるブラックカレッジをどのような基準であれば、正当に、公平性をもって評価できるかという点であった。

### (2) Middle States Association of Colleges and Schools (MSA) の創立会議にみる特色

MSAについては、資料が少なかつたため、その1893年の創立会議における記録から特色を分析する。MSAは、ニューヨーク州周辺を管轄するアソシエーションであり、アメリカの発展の歴史から見ても、NEASCと比較的類似した状況にあるといえる。

出席者名簿を見ても、教育機関名のアルファベット順に記述されており、その記載順序に大学

と中等教育機関の区別がない。出席者は100名を優に超え、その半数以上が中等教育関係者である。その会議内容は、リベラルアーツとして教えるべきはどのような内容であり、学士に必要な科目はどのようなものか、といった、大学で提供される教育内容に深く切り込んだものだったことが興味深い。こうした深い議論を経て認定基準が策定されていくことになるが、基準や定款にどのように反映されたのかの資料を得ることはできなかった。

しかし、恐らく NEASC や NCA と同様に初期のころは、定量的な基準が用いられたものと考えられる。セルフスタディ中心に基準改定を行った過程も含め、これを明らかにするのは今後の課題である。

### (3) セルフスタディの定着。

セルフスタディは、先述の通り、NCA によって1935年にその元となる考え方が開発された。すなわち、教員数、施設・設備、カリキュラムを型にはめるような取り決めなど、いわゆる定量的基準が大学を評価するにはふさわしいとは言えないという批判に応えて考案されたものである。しかし、これが実際に基準に反映されるのは、第2次世界大戦後である。

その背景には、SACS でも見られたように、復員軍人援護法により、大学への進学・復学者が増加するとともに、高等教育機関の多様化が始まったことがあげられる。とりわけ職業技術系の中等後教育機関の急増により、一律の基準での評価がさらに難しくなり、それぞれの教育機関のミッションに基づく評価を行うことが特定の地域を越えて、全米で必要になった。

それに伴い、評価者の研修が盛んにおこなわれるようになった。

以後、全米の6つの機関別アソシエーションすべてにおいて、2000年頃まで、セルフスタディが認定の中心のプロセスとして位置づくことになる。

セルフスタディは、日本においては自己評価と訳され、外部評価からは独立したものとして導入されたが、ちなみにアメリカにおいては、外部評価機関が設定した基準に基づき、教育機関が自ら実施する教育プログラム、人材配置、構造の質と有効性を審査・評価することと定義され (Council on Post-Secondary Accreditation)、大学関係者は一般名称としてではなく理解している場合が多い。

### (4) セルフスタディの展開

セルフスタディを中心とし大学のアクレディテーションは、復員軍人援護法から発展した高等教育法における奨学金受給資格と大学のアクレディットの連動に見られるように、就学への経済支援と大きく結びついたがために定着した面も否めない。

その連邦政府による財政支援は、1990年代以降、アメリカ経済の低迷、中等後教育への進学者の拡大で厳しさを増している。

一方、一定以上の水準にある大学からは、アクレディテーションにかかる人的、財政的負担の問題、基準が低すぎて毎回受ける意味がないことなどの不満が出ている。

この2つの課題は、相反するものである。連邦政府は、奨学金を提供するに値する明確な根拠をデータで示すことを求めており、一定水準以上の大学は、アクレディテーション団体が政府の肝いりで示す数値基準より、自分のレベルに合った評価の実施を求めている。

このどちらの要求にもこたえるべく、機関別アクレディテーション団体は、それぞれ異なる評価プロセスを構築し始めている。そこにも一方的な評価ではなく、大学の立場を尊重した認定基準に基づいた評価が行われており、外形的には多様に变化したとしても、教育機関のセルフスタディを核としたプロセスがとられている。これらのプロセスについては、今後、具体的な追跡調査を行う必要がある。

(5) 以前に調査した NEASC、NCA、今次の調査の SACS それぞれ出発から異なる状況で活動を行ってきた。すなわち、小規模で私立の比較的良質の教育機関が多い NEASC、アメリカ東部に追いつくことを目指して発展した NCA、特に NCA は管轄する州が多く、州立大学主導であるという特徴を持っている。そして、保守的で人種問題を抱えている SACS である。現在においても、成立史を背景と考えられるような評価の特色を持っている。しかし、それぞれの活動は年を経て、数値基準を中心とした一律の基準では評価が立ち行かなくなったことから、セルフスタディを取り入れた評価を行い、連邦政府からの要請にも、定性的な基準によってそれなりに対応し、30年以上、セルフスタディを中心とした評価をしてきた。近年、各アクレディテーション団体がスタイルを変えつつある評価については、その底流には共通の考え方があることの確認が今後の課題である。

### < 主要文献 >

Miller, J.D. "A Centennial History of the Southern Association of Colleges and Schools 1895-1995" the Southern Association of Colleges and Schools.

Dabney, C.W. "Requirements for the Bachelor's Degree in Southern Colleges-A Report Prepared for the Association in the Southern States, Read at the Meeting at Athens, Georgia, November 2, 1898" Reprint by Forgotten Books.

Association of Colleges and Preparatory Schools of the Southern States  
"Proceedings of the Seventh Annual Meeting, Held at the University of the South,

Sewanee, Tenn., November 6-8 1901" Reprint By Forgotten Books.

"Proceedings of the First Annual Convention of the Association of Colleges and Preparatory Schools in the Middle States and Maryland" (Dec. 1 and 2, 1893) Reprint By Forgotten Books

Newman, M. "Agency of Change - One Hundred Years of the North Central Association of Colleges and Schools" Thomas Jefferson University Press

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計1件

<p>1. 著者名                  大学基準協会、永田恭介、山崎光悦、早田幸政、工藤 潤、田代 守、大森不二夫、生和秀敏、松坂顕 範、高森 智嗣、山田礼子、川島太津夫、蔦 美和子、堀井祐介、堀田泰司、原 和世、前田早苗</p>	<p>4. 発行年                  2021年</p>
<p>2. 出版社                  東信堂</p>	<p>5. 総ページ数                  344</p>
<p>3. 書名                  教学マネジメントと内部質保証の実質化</p>	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------